

世界の闇で発見!こんなところに主ヤハウエ!

岡嶋千宙

奨励者紹介[おかじま・ちひろ]

日本キリスト教団向島伝道所伝道師

わたしは言う。
「闇の中でも主はわたしを見ておられる。
夜も光がわたしを照らし出す。」
闇もあなたに比べれば闇とは言えない。
夜も昼も共に光を放ち
闇も、光も、変わるところがない。

(詩編 139編11—12節)

思いがけずに舞い降りる幸運。想定外に引き起こされた災難。予想もしなかった苦しみ。降って湧いたような嬉しさ。

それらが「善いこと」であれば、喜びの絶頂、とでも言える、まるで光の中にいるような感覚を味わうでしょう。逆に、「悪いこと」であれば、恐怖や、不安、苦しみに襲われ、まるで闇の中にいるような状態に陥ることがあります。初めは「善いこと」だったのに、後に「悪いこと」に、その逆で「悪いこと」が「善いこと」に変わる、ということだってあります。思いがけない時と場所で、思いがけない仕方で、思いがけない出来事に遭遇し、思いがけない経験をする。

今日は、わたし自身が経験した、「思いがけない出来事」について、お話ししたいと思います。といっても、「わたし、こんな経験したんです!すごいでしょ□」、と自慢したいわけではありません。こう見えても、一応、教会で働く伝道師ですから、わたし自身に起こった思いがけない出来事を語ることで、青春の真っ只中を生きる皆さんに、わたしが出会ってきた、そして今も出会い続けている神様についての証をしたいと思うのです。

わたしにとっての「思いがけない出来事」

きっかけは、ある人との出会いでした。

今から5年前の2013年4月、わたしは、関西学院大学(以降、関学)の神学部に入學しました。

その年の秋学期に、講義形式ではなく、ゲストスピーカーが毎回の授業に来て、ご自身の経験や体験をお話してくださる、という授業を受講しました。学期始まりのオリエンテーションが終わり、本格的に授業が開始されてから数週目。その方がゲストスピーカーとして来てくださいました。コーディネーターの先生による紹介が終わり、その方のお話が始まりました。

わたしは引き込まれていきました。その方の言葉を聞きながら、わたし自身のことが思い起こされていっ

たのです。もちろん、わたしとその方とは、それ以前に面識があったわけではありません。

その方は、彼女の人生に起こった出来事を、またその出来事を通して彼女自身が感じたことや思いを、語ってくれていました。ですが、わたしには、人ごとには思えませんでした。彼女がわたしたち学生の前で紡ぎ出す物語の多くの部分に、わたし自身のこれまでの人生とオーバーラップするところがあったからです。幼少の頃、学生の頃。社会に出てからのこと、結婚してからのこと。彼女のストーリーを聴きながら、わたしは、そのストーリーとあまりにも似通っている、わたし自身の幼少期、学生時代、社会人、そして結婚してからの時期を思い返さざるをえませんでした。

ただし、一つだけ違っていたことがありました。その人は女性として生きていましたが、わたしは、男性として生きていました。授業でお話ししてくださった方は、男性として生まれながらも、お話をしてくださった時よりずっと以前から、女性として生き、日常生活を送っている、トランスジェンダーの方でした。その方の語りが、わたしの中にある「女性」を呼び起こしたのです。

カミングアウト

「カミングアウト」という言葉、皆さんもご存知だと思います。今では広く知られ、セクシュアルマイノリティの当事者が、他の人に対して、自分自身のセクシュアリティを伝えること、という意味で用いられています。しかし、カミングアウトとは、当事者が自分自身に対して、自分の心の声、心が求める自分のセクシュアリティのあり方を伝え、確認していく作業でもあります。

たどれる範囲でわたし自身の過去の記憶を振り返ってみると、遡ることのできる一番初めの記憶の中に、すでに「男」ではない「女」としての自分がいました。保育園児だった時、よく一緒に遊んでいたのは、女の子の友だちでした。彼女たちとおままごをするのが好きでしたが、その場面を男の子の友だちに目撃され、からかわれ、何とも言い表すことのできない悲しさ、悔しさが胸に込みあげてきたのを今でも覚えています。小学生になると、歩き方や仕草がおんなっぽい、と言われるようになり、それが嫌で、男友だちや男の先生の歩き方、仕草を真似るようになりました。中学の頃、初めて自分で買った小説が女性向けの「コバルト文庫」で、ものすごく好きで読んでいたのですが、その姿を見た兄に、「おまえ、男なのにそんなの読めるの？気色わる!」と言われ、それ以降、「コバルト」を避け、「新潮」や「角川」という名前のついた本を買い、読むようになりました。

そんなことがある度に、自分の性について、考えさせられてきましたが、わたしは、他者に対しても、自分自身に対しても、カミングアウトをしませんでした。その代わりに、周りの人がわたしに向ける批判の声を自分の中に取り入れるようになっていきます。自分は、男だ、男として生まれたのだから、「女」として生きるなんてあり得ない。生まれた時の性別を変えて生きるなんて、おかしい。どうかしている。変態。異常。化け物。

自分の中にある「女性」の部分に対して、わたし自身がレッテルを貼り、自分を縛り、裁く。それは、つらいことではありましたが、どこかで、安心感を与えてくれるものでもありました。わたしは青森で生まれ、18年間そこで過ごしましたが、日本の片田舎で育ち生きていくうえで、それは、必要なことでもあったのです。周りの人たちが発する批判の声に同調し、その批判を自分のものとして、自分の中にある「女の子」を縛り裁くことによって、家族にも誰にも気づかれず、地域社会で目立つこともなく、安全のうちに生活す

ることができる。いわば、生きるための知恵。

ところが、関学の授業における、トランスジェンダーの方との出会いは、長い年月を経て積み重ねてきたわたしの努力を、生きる知恵を、いとも簡単に吹き飛ばしてしまいました。その授業をきっかけに、わたしは、ずっと避けてきた「カミングアウト」という作業を始めるようになります。自分自身の性、セクシュアリティと、改めて、真剣に、真正面から向き合う。わたしの中にある「女性」の部分、わたし自身が縛り、裁き、それによって、身の保身を、社会生活の安定を求めるのではなく、また、「常識」とか、「普通のこと」とか、わたしの外からもたらされるものに身を委ねるのでもない。縛りも、裁きも、常識も、すべて取っ払って、わたし自身がこれまでどんな性を望んできたのかを振り返り、これからわたしはどのような性を望むのかを模索する。自分自身に課していた縛りと、下していた裁きから自由になり、心の声を、本音を、聴き直す作業。

闇の中の苦しみ

自分の中にいる「女の子」を押し殺し、男性として生きてきた30年以上の年月。その生き方を見つめ直すというのは、とてもしんどいことでした。神学を学ぶために入学した大学で、自分のセクシュアリティについて問い直される、ということは想定しておらず、あまりにも想定外のしんどさから、「もう生きていたくない」と思ったことが何度もありました。解決の道筋など全く見えなくて、どうすることもできない現状に耐えきれず、刃物で自分の手首を斬りつけたこともあります。精神科医に通うようになり薬を処方されたものの、一向に心の重荷は取れず、処方してもらった睡眠薬を多量に飲んで意識を失い、救急車で運ばれたこともあります。

生きるのがつらかった。生きている、という感覚が麻痺しかけていた。なぜこんなにも生きるのがしんどいのか。男性の体を持ちながら、「女性である、女性として生きたい」、という思いをもつこの「わたし」という存在。神様にとって、「わたし」は「失敗作」なのではないか。その「わたし」が生きている意味なんて、ないのではないかな。

神様が見えない。神様を感じられない。神様は、どこにいて、何をしているのか。神様は、「わたし」を見捨てたのではないかな。いや、そもそも、初めから、「わたし」という存在に、神様は目を留めていなかったのではないだろうか。牧師になろうという思いも、そのために関学で学び始めたことも、すべて無駄ではなかったのだろうか。

神様のことをもっとよく知り、多くの人に神様のことを伝えるために入学した関西学院大学。その学びの途中、わたしは、神様を失いかけていました。

闇の中での出会い

ところが、わたしに起こった出来事の思いがけなさは、それで終わりではありませんでした。戸惑い、悩み、苦しみ、生きる気力を失い、神様の存在を遠くに感じるようになっていたわたしに、またもや、思いがけずに、生き抜くための助け、支えが与えられるようになっていったのです。

わたしは一人ではありませんでした。友が、仲間が、そばにいてくれたのです。わたしの指導教員は、わたしが研究室に足を運び、悩みや心の重荷をぶつける度に、時間の許す限り、ずっと寄り添って、親身になって耳を傾けてくれました。その先生の紹介で出会った人たちは、自らが、セクシュアリティについての

悩みを抱えながらも、生きることを諦めずに前に進んでいく姿を、身をもって示してくれました。セクシュアルマイノリティへの理解のある牧師との出会いが与えられ、その牧師が牧会する教会で礼拝を守ることができるようになりました。それ以外にも、たくさんの当事者、よき理解者との出会いが与えられ、関学の同級生、職場の同僚や上司、本当にたくさんの人たちが、当時のわたしの人生にかかわり、「男性として生き続けるのか」、それとも「女性としての歩みを始めるのか」、自分自身の性に葛藤するわたしを、それぞれの仕方で支えてくれたのです。

それだけではありません。当時、わたしは、「生きている」という感覚を失っていましたが、それでも、肉体としては生きていました。生きているという意識はないが、肉体としては生かされている。そんな状態が続いていましたが、あるとき、ふと気づかされたのです。

「わたしの代わりに、わたしではない誰かが、わたしの命を生きている」。

それは、神様がわたしのもとに送ってくださっているイエス様でした。わたしが、苦しみ、もがき、涙を流し、自分自身を否定し、自分の命を感じることでできない時に、イエス様が、わたしに代わってわたしの命を生きていてくれたのです。

関学の授業をきっかけに始まった、自分のセクシュアリティと向き合うという歩み。それは、わたしにとって思いがけない、まさしく闇の中を彷徨うような経験でした。わたしは、その闇の中で、自分を失い、神様をも失いかけていました。しかし、その闇の中に、闇のまっ只中に、イエス様がいたのです。イエス様をわたしのそばに送り続けてくださる神様がいたのです。

闇の中でも 闇を超えて

今、わたしは、日常生活のほとんどを、女性として生きています。本名ではない別の名前を使用し、職場でも女性として働いています。キリスト教の世界では、依然として、出生時の性別とは異なる性別で生きることは「罪」である、ということが声高らかに主張されたりします。しかし、わたしは、そう思いません。わたしたちが手元に行っている聖書の言葉、本日読んだ詩編139編には、神様が、生まれる前からわたしたちを知っていて、わたしたち一人ひとりのすべてを、母親のお腹の中にいるときから造り上げられた、と記されています。神様は、わたしが出生時の性別とは異なる性で生きるということを知っていたのであり、トランスジェンダーという姿にわたしを造り上げ、そしてその姿で生きるわたしを見て、「とても良い」と言ってくださっているのです。

京都の伏見区にある小さな教会で伝道師として働くわたしには、今、一つの夢が与えられています。セクシュアルマイノリティの人たちとともにある教会を形成するという夢。女性として日常生活を送り、伝道師として働く、ということも、セクシュアルマイノリティの人たちとともにある教会形成という夢も、関学に入学した時には、全く想定していなかったことです。それは、神様が、思いがけない時期に、思いがけないところで、思いがけない仕方で、わたしに用意してくださった、わたしの新しい命の道です。

ここにいる皆さんが、わたしと全く同じ経験をする、なんてことはあり得ないでしょう。人生いろいろですし、誰が、いつ、どんな出来事を、どのような仕方で経験するかということは、誰にも分からないし、一つとして同じ経験なんてものはありません。

ですが、思いがけない出来事は、誰にでも降り掛かるものです。ひょっとしたら、今まさしく、そのような出

来事の真っ只中において、喜びを、あるいは反対に苦しみを感じている人が、この場にも、いるかもしれません。また、今はそうではないとしても、いつか、そんな状況に陥る可能性は、わたしを含めて誰もがもっています。

思いがけない出来事に遭遇し、生きる力を失いそうになったら、思い出しましょう。闇、と思えるようなところでも、いや、そのような場所だからこそ、わたしたちを支え、わたしたちを助けてくれる仲間や友がいるということを。闇も光も超えた存在である神様が、わたしたち一人ひとりの命を支え、ともに生き抜いてくださるイエス様を、わたしたちのもとに送ってくれているということ。

2018年10月17日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録